



AT-100



AT-300 Wタイプ

が実現した。

AT-300シリーズは、1989年に提供された。金融機関の完全週休2日制の実施と自動取引装置の運用時間延長にともない、ノンストップ運用、セキュリティ強化が課題になり、このようなニーズに応じて処理能力を増強したのが、AT-300シリーズであった。

顧客の待ち時間を短縮するため、ATMの処理速度を向上するという課題に対して、1992年に開発されたAT-300Vは、カード支払いはもちろんのこと、通帳を利用した入出金取引、振替、振込、記帳取引のすべてにわたって大幅なスピードアップを実現した。たとえば、カード支払いの場合、14秒という速さで5万円の現金を引き出すことができた。なお、既存のAT-300も改造によって、処理速度のスピードアップが可能であった。

金融システムのほか、1970年代から80年代にかけては、一般民需市場から大小さまざまな各種ターミナルシステムの受注が相ついだ。そのなかで比較的規模が大きく、まとまった受注となったのは予約発券システムで、近畿日本ツーリスト、日本交通公社、日本旅行社、全日本空輸、日本エアシステムなどをはじめ、国鉄(JR)の200万人定期券発行システムにいたるまで数多くの顧客に導入され、好評を博した。

ミニコンピュータOKITACsystem50

「ミニコンの沖」といわれるように、沖電気のOKITACsystem50シリーズは、ミニコンピュータ市場において好評であったばかりでなく、金融機関情報システムの中核プロセッサとしても利用された。これまでのOKITACsystem50の2モデルに加え、



OKITACsystem50V

1978（昭和53）年にはモデル60，モデル10を追加した。モデル60は，従来のミニコンでは不可能であった大型システムの構築を可能にし，データ通信，計測制御，事務処理，技術設計などに利用された。また，モデル10は，パーソナルコンピュータとして利用できるほか，データ通信の端末機としての利用も可能であった。システム50シリーズの各モデルは，完全な互換性をもっていた。

1982年にはOKITACsystem50Vシリーズが発売された。これは，小規模システム用のモデル15と，大規模システム用のモデル65の2機種からなっていた。OKITACsystem50Vは，32ビットMPU，分散処理システムの需要に応えることができる，本格的な日本語処理機能をもっていた。OKITAC-2300金融機関情報システムのプロセッサには，このOKITACsystem50Vが用いられた。ミニコン事業は，社内のシステムに不可欠なプロセッサを開発・提供するという重要な役割を担っていたのである。

沖電気は，1988年にスーパーミニコンOKITAC-8300シリーズを発表した。OKITAC-8300シリーズは，単一プロセッサで3.5MIPS（1 MIPSは每秒100万命令を実行する速度）の能力をもち，IBM社やDEC社のスーパーミニコンに対抗するシリーズであった。ネットワーク時代に対応するために，従来のミニコンよりも高性能なクラスへの参入がめざされたのである。

オフコン事業とsystem 9

オフコン事業は，民需向け商品として有望視された分野である。沖電気のオフコン事業の中心は，1976（昭和51）年に発売されたOKITACsystem 9であり，79年には操作が簡単なペンタッチシリーズが追加された。また，同年にはsystem 9のニューモデ



OKITACsystem 9 シリーズ

ルも発売された。

system 9 の発売は、沖電気にとってオフコン市場への新規参入であった。すでに30数社がひしめくオフコン市場に飛び込むことは困難が予想されたが、潜在的な市場の大きさと「ミニコンの沖」の優位を生かそうという意図であった。

system 9 の基本モデルは、毎秒200字の印字が可能な高速プリンタ、1 Mバイトの記憶容量をもつフロッピーディスク装置 2 台を備えたモデル30であった。そのほか、外部記憶装置に10Mバイトのカートリッジディスクを採用したモデル55、固定ディスクを装備したモデル50、60、70があり、6300余種の漢字をプリントできる高速プリンタをもつ漢字シリーズもあった。

オフコンの販売活動を進めるため、1979年 8 月、オフィスコンピュータ・プラザが中央区京橋に設置された。そこにはOKITACsystem 9 など、各種システムが展示され、広く一般に沖電気のオフコンをアピールするとともに、販売店の活動をサポートする意図があった。

1982年にはsystem 9 の新モデルとして、モデル200、300、400、700という 4 機種が発売された。各モデルともに入力から出力まで一貫して日本語処理ができる本格的な日本語システムをもち、対話型のOSが提供された。とくにモデル700は、オフコンレベルでは初めてとあってよいデータベースシステム、分散処理ネットワークシステムなど高度なシステムが構築可能であった。

1982年 6 月にsystem 9 をインテリジェントターミナルとするセメント物流システムを導入した宇部興産の場合、UNIVAC1100をホストコンピュータとして全国50カ所の支店、営業所、セメントセンターに沖電気の分散処理プロセッサーOKITAC-DDP80

とsystem 9が配置された。system 9では、今日どこそこにくら出荷した、いくら売り上げた、センターでの受け払いはどうか、といったことがすぐわかるようにデータをとり、同時に領収書・伝票の発行を行った。system 9によって、従来のホストコンピュータ集中型から端末機能の分散処理による多様化が実現したのである。

しかし、パソコンやワークステーションが発展してくると、オフコンは中途半端な存在となり、しだいに存在意義を失っていった。1987年4月、経営構造改善委員会の検討を経て、system 9は新機種およびアプリケーションソフトの開発を中止すること、ただしパソコンでカバーできる市場には注力することが指示されたのである。

パソコンを核にOA事業推進

1980(昭和55)年5月、パーソナルコンピュータ*if*800モデル10、モデル20が発売された。沖電気はホビーパソコン市場をねらわず、最初から*if*800シリーズは本格的なビジネス向けパソコンとして開発された。

モデル10はプリンタを標準装備し、モデル20はフロッピーディスク装置、ディスプレイ、キーボード、プリンタを備えたオールインワンタイプであった。ソフトウェアはBASIC言語を使用し、業種別・業務別のアプリケーションソフトも用意された。モデル10は37万円、モデル20は128万円という価格で発売され、とくにモデル20はわが国のビジネスパソコン市場を拓いた機種として高い評価を受けた。

1981年には*if*800シリーズの最上位機種として、モデル30が提供された。モデル30の価格は149万8000円で、漢字処理機能、高解像度のグラフィック、漢字プリンタ、2Mバイトフロッピーディスク装置などを備えていた。300万円以下の機種のなかでは、8



if800シリーズの最上位機種「モデル30」

ビット機でありながら16ビット機を抑え、もっとも高いユーザー評価を得ることができた。if800シリーズの売れ行きは好調で、80年に3400台、81年に1万5000台の実績をあげ、82年4月からはアメリカへの本格的な輸出を始めた。

if800シリーズモデル10、20、30の発売以降、16ビット機パソコンの開発では、沖電気はIBM互換機路線をとるようになった。わが国のパソコン市場が急速に立ち上がったこの時期には、いまだ標準規格は成立しておらず、パソコンメーカー30数社はそれぞれの規格を採用しつつ、規格競争と価格競争が始まっていた。

日本語ワープロも黎明期を迎えた。沖電気は、1980年に日本語電子タイプライタとしてレターメイト80を発売した。文書校正、編集、ファイリングの機能など、ワードプロセッシングに必要な機能を持ち、だれにでも使える全文字配列のキーボードを備えていた。価格は185万円と、当時のワープロとしては低価格で、普及機として好評を得た。

つづいて、1981年には日本語ワードプロセッサのレターメイト800を発売した。これは、レターメイト80の上位機種であり、ファイル通信機能、グラフ処理機能などを備えていた。日本語ワープロのスタート時点では、好評を得た沖電気の商品であったが、普及期に入ると、販売体制の不十分さがたたって、ヒット商品を生み出すことはできなかった。

沖電気においてOA事業という事業領域が設定されたのは、1982年の「経営体質改善計画PART II」が最初である。82年度のOA事業部のミッションは、「収益化への挑戦」であり、通信端末、ファクシミリ、OA（パソコン、ワープロ、オフコン）の各ビジネスユニットが設定された。このころのOA事業の中心は、パソコン、ワープロ、オフコ



レターメイト80

ンを擁し、新しいシリーズを商品化しつつあったOAビジネスユニットであるが、依然として収益事業ではなかった。

1982年に日本電気が発売したPC-9801は、29万8000円という価格でありながら、同じ16ビット機とのベンチマークで優位に立った。さらに、豊富なアプリケーションソフトを品ぞろえする戦略によって、PC-9801は瞬く間にわが国におけるスタンダードの地位を占めるようになった。87年にはパソコン市場の90%を占める巨人が誕生した。その他のパソコンメーカーは、たとえ性能の高い機種を提供しても、需要のシフトが起こりにくい構造ができあがってしまったのである。

沖電気の16ビット機は、1985年1月、*if*800シリーズの上位機種として、モデル60が追加された。モデル60にはスーパービューと称するマルチウインドウソフトがOSに組み込まれ、ディスプレイ上に複数の画面を表示することができた。つまり、すでに記憶されているデータを表示して、そのデータを使いながらワープロで文書を作成するといった機能の付加である。さらに、アプリケーションソフトの間でデータの共有・利用が可能になり、キャプテン端末になる通信ソフトも装備していた。

ワークステーションの開発

沖電気は、1982（昭和57）年に民需営業に注力する方針を打ち出したとき、単体販売よりもシステムとして拡販していく方針をとっていた。その後、84年ごろにはワークステーションをベースとしたシステム事業をめざすプランが、OA事業の進むべき方向とされた。85年9月に発表された32ビットパソコン*if*1000 UNITOPIAモデル10Mは、1Mバイトのメインメモリ、40Mバイトのハードディスク装置、CRTディスプレ